

国連NGO横浜国際人権センター・うずしおランチ T-over人権教育研究所・人権こども塾ニュース

人の世に熱あれ人間に光あれ⑨ ～なぜ差別・被差別を超えて語り合えるのか～

1991年度板野中学校3年B組の部落問題学習は、部落出身である私の人生そのものが教材となり、同和地区・同和地区外の生徒が「共感と連帯」「信頼と尊敬」「互いへの感謝」の中で、ひたむきに自分の思いを語り合った人権学習です。

私は、11月19日(火)に開催される第21回徳島県中学校同和教育研究大会の前日、その公開授業に寄せる思いをひたむきに語っています。それは、公開授業の資料とした資料「水平社宣言讃歌」の中にある詩「よろこび」についての思いと願いです。

資料「水平社宣言讃歌」の中にある詩「よろこび」との出会い

苦勞しながら、自分のあらゆるものを子育てにかけてくれた両親に応えるためにも、私は、部落差別をなくしていく教師になろうと思いました。

教師になった当時、自分を部落の人間と知っている人には、何事も躊躇なく語れました。しかし、部落出身を知らない人とは、常に一步引いた弱さがありました。部落の人間でありながら、心の奥底で、部落を恥ずかしいと感じる自分自身がいて、部落を差別していました。

そんなとき、私を大切にしてくれる部落出身の先生から、高知市で開かれる部落解放の全国集会に参加しないかという話がありました。当時、同和教育担当でもない新任教師が、そのような大会に参加することは、同じ職場の教職員に「自分は部落の人間です」と宣言することでもありました。

家族に「3日ほど高知である部落解放の研究会に行ってくるから…」と話すも母から「おまはんがそんな会に出ていくけん、みんな腰を引いていくんと違うん」と言われました。また、先輩の先生に「同和教育主事でもないのに、どうしてそんな会に行くのか」とも問われました。それらに明確な答えができない自分が中途半端で、惨めに思えました。

職場では「3日も学校をあけて…」という思いをもたれ、「いっそ出張、やめたらか」とも思いました。そんな中途半端で優柔不断な思いを抱えたまま、研究大会に参加することになりました。しかし、私はその大会でとてつもなく大きいものを手に入れることができました。

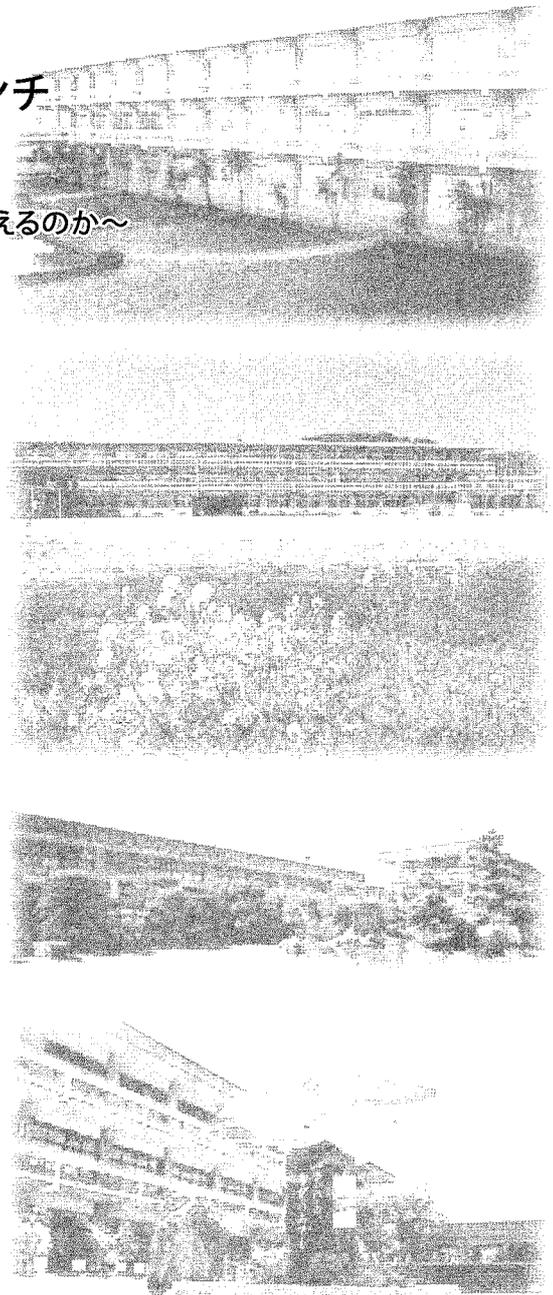
大会初日の夜、全国部落出身教職員の会に参加しました。そこで、私は、部落を背負い、揺れながらも、部落解放を願い、同和教育に取り組んでいる教師が全国にたくさんいることを知りました。その先生方の姿が私に大きな喜びを与えてくれました。そして、奈良県の仲間が提出した資料に記された西口敏夫先生の「よろこび」という詩が、私の生き方を大きく変えていきました。

その詩を読み、胸の奥からこみ上げてくる感動でいっぱいになりました。この詩がある限り、どんな苦しい状況に立たされようが、頑張ることができる。私は「よろこび」という詩をわが胸に刻みつけるように、繰り返し読みました。

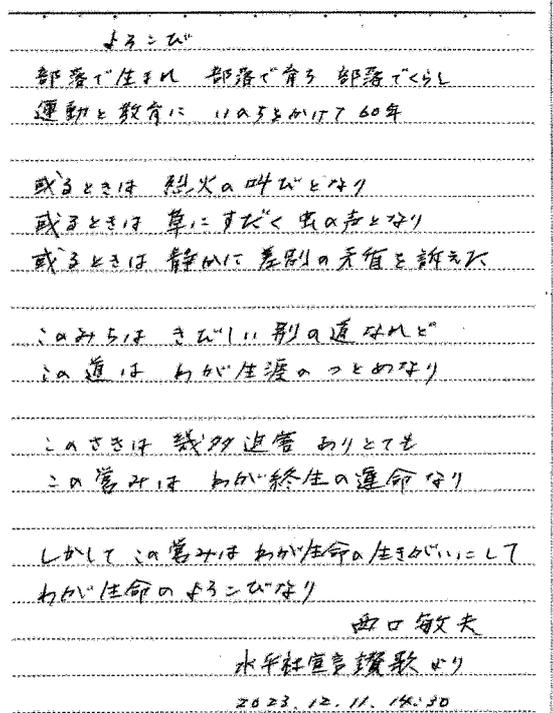
宿舎に帰り、湧き上がる喜びをかみしめながら、私は、県民手帳に「よろこび」の一字一字を心に刻みつけるように記していきました。私の心に、詩「よろこび」の言葉が突き刺さってきました。それ以来、毎年新しい県民手帳に「よろこび」の詩を書き記しています。

本気の人権学習は、——「すべてを変える」

うずしおランチ共同代表 森口 健司



写真は、1991年同時の板野中学校全景と中庭



2024年の県民手帳に記した詩「よろこび」